

息子にバトンを渡すように引退した司さんが、マネージャー兼監督となり、週末は往復数時間かかるサーキットまで赴くこともしばしば。そんな2人を優しく見守る母の幸恵さんと共に、家族一丸となって技を磨いて来ました。「レースではゾーンに入り過ぎると恐怖心が消えて転倒しやすくなります。かと言って集中力が切れても伸びにくく、周りの選手との駆け引きも含めて、結果を求めれば求めるほどリスクが高まる競技です。そんな中でほんの一瞬、「ここを走ればいい」と確信が持てる道筋が見える。まるで細い糸の上を走り抜けるような感覚です」と、レーサーならではの感覚を口にする山浦さん。毎日の筋トレを欠かさない身体的な強さと同時に、要となるのは集中力を操るしなやかで強靱な精神力です。「車両メンテナンスなどに乗れない期間があると、全身が筋肉痛になります。」

私たちの挑戦



ロードレーサー

やまうら せいしろう 山浦正司郎さん

17歳

# Challenge!

## ロードレースへの挑戦



### プロフィール

玉名工業高校3年。元レーサーの父の影響で、12歳でサーキットデビュー。以降、多くのタイトルを獲得。現在、福岡に拠点を構える『TEAM WITH 87BEET』所属。昨年『ST600』クラスで結果を残し、国際ライセンスに昇格。

勝ちたい!と思った瞬間から  
レーサー人生が幕を開けた

好きな教科は英語。嫌いな教科は数学。人前に出ることが大好きなクラスの盛り上げ役。普段は玉名工業高校の生徒として、学生生活を謳歌する山浦正司郎さんですが、週末にはサーキットの中を時速260キロで駆け巡るロードレーサーとして活動する意外な二面を持っています。小学6年でサーキットデビューを果たすと、これまで数々の大会でタイトルを獲得してきた山浦さん。昨年は、そ

るようになりました。

現在は、実力派レーサーが凌ぎを削る「ST600」クラスで切磋琢磨する山浦さん。昨年からは『Kawasakiプラザ福岡東店』の若手育成プロジェクトに選抜され、『TEAM WITH 87BEET』に所属し、愛車の『ZX6R』やメンテナンスなどのサポートを受けています。「レーサーとして乗ってみたい車種

### しなやかで強靱な精神力で瞬間を捉える眼を養う

改めてバイクに乗っているだけでも相当な筋力を使っていることを実感します」と話す山浦さんは、集中力を高めるために1年ほど前から瞑想に取り組んでいます。「1回30分のレースは集中するとあっという間ですが、日常的にその状態に慣れておくことが大事なので、初めは4分間の瞑想からスタートして、今は30分でも随分楽に瞑想ができて

## ロードレースを通じて 自らの生きる指針を見出す

はたくさんありますが、今はこの恵まれた環境に感謝しつつ、実力を培うことに注力しています」と嬉しそうな表情を浮かべる山浦さん。そこにあるのは、前向きな向上心と周囲への感謝の気持ちです。最初に出会った時のどこかあどけなさが残る高校生とは違う、バイクを通じて自らの生きる指針を見出す青年の姿がそこにはありました。



将来は、ロードレースの本場・ヨーロッパで記録を残すという野望も。



山浦さんを支えるチームの皆さん。チーム一丸となって勝利を掴む!



当時4歳。父が元レーサーのため、幼少期からバイクは身近なものでした。

の実力が評価され、国際ライセンスに昇格。着実に実力を積み上げる期待のレーサーです。ロードレースの世界に踏み込んだのは、レーサーとして活動していた父の司さんの存在が大きく、幼い頃からバイクは山浦さんにとって身近な存在でした。「レーサーになりたいという明確な意思はなかったのですが、鈴鹿で開催された大きな大会を観に行った時、無性にザサーキットで走ってみたい!という衝動に駆られました。父に伝えると『自分が引退するまで待て』と。それから1年半待ち、サーキットに立てた喜びと勢いだけで挑んだ、最初の大会結果は惨敗でそれがとにかく悔しくて悔しくて、当時を振り返ります。「次の大会で勝ったことで、すっかり魅了されてしまいました。レースの世界では遅咲きのデビューだったからこそ、短期間で濃い経験ができています。」「何がなんでも勝ちたい!」そう思った瞬間から、山浦さんのロードレーサーとしての人生は始まっていたのです。

『将来的に農園を継ぐ』という強い想いがあったから。4年間の社会人経験を積み、挑戦へと舵を切ったのは、農園で育てられた『廃棄梨』の存在を目の当たりにしたことがきっかけでした。「温暖化の影響で年々、日焼けする梨は増えています。平均で全体の収量の約3割は商品になりません。傷んだ部分を取り除けば、美味しさは変わらないのに捨てられてしまふ。それが何よりもったいなくて、そこで、廃棄梨を生かす方法を模索するために、福岡にあるカフェの専門学校へ進学します。専門学校では、メニューの開発から空間構成まで、カフェのイコハを2年間かけてみっちり習得。原価計算やメニュー開発などの技術的な側面も大事ですが、それよりも重要なことは、付加価値だと教わりました。付加価値とは、例えば接客の雰囲気やスピード、志の部分ですね。そういった目に見えない

廃棄梨への想いを胸に  
道を模索し続けた2年間

い部分を何より大切にしています。当初は、実店舗を構える構想を膨らませていましたが、コロナの波が押し寄せ、計画は思うように進まなかったと言います。「僕の目的は、あくまでも廃棄梨を生かすこと。多少の困難はあっても諦めるといって選択はありませんでした」と自らの活動に対する揺るぎない想いを語ってくれました。

廃棄梨の活用で地域を救う！  
若き挑戦者が描いた夢

の楽しみを広げる活動に取り組んでいます」と笑顔を見せる大淵さん。今後もキッチンバスで梨の存在をアピールしながら、そう遠くない未来にはカフェの実店舗を開き、地域に約100軒ある農園の廃棄梨の利活用にも取り組みたいとのこと。地域に新しい風を吹かせる若き挑戦者の活動は、大淵梨園の梨のように大きな可能性を秘めています。



Buchi Stand

私たちの挑戦



ぶちスタンド

おおぶち たかのり 大淵 峰昇 さん

26歳

Challenge!  
廃棄梨の再利用への挑戦



各地で荒尾の梨をアピール！  
廃棄梨で作る絶品スムージー

野原地区の県道208号線沿いにある『大淵梨園』の直売所の敷地内に、突如現れたオシャレなバス『ぶちスタンド』。毎年、梨のシーズンを心待ちにしている皆さんの中には、このキッチンバスが気になっていたら人も多いのではないのでしょうか。これは、同園の4代目を担う大淵 峰昇おおぶち たかのりさんが「荒尾の特産品である梨の美味しさをスムージーを通じて広めたい」と、昨年9月にオープンした、廃棄



プロフィール

新幹線の整備士として4年間勤務した後、専門学校で2年間、カフェのメニュー作りから空間構成までを学ぶ。その後、昨年9月にキッチンバス『ぶちスタンド』をオープン。

梨を使ったスムージーが話題のキッチンバスです。

「スムージーの開発当初は、フレッシュな梨を使いたかったのですが、梨は元々加工がしにくい果物で、なかなか納得する味ができず試行錯誤の連続でした」看板メニューの『梨スムージー』が完成したのは、なんとオープン1週間前。キッチンバスの機材を依頼していた業者から、機材の展示会のチケットをもらったことで解決策を見出していきます。その展示会で食材を急速冷凍する機材を見つけた大淵さんは「これなら納得いく味が再現できるかも！」と閃きました。「急速冷凍のメリットは、食材の鮮度と美味しさを損なわずに冷凍できること。梨の香りや水分調整がしやすくなったため、そこから一気にメニュー完成までこぎつけました」1杯につき小玉1個分の冷凍梨を使用し、梨特有の香りと味を生かした『梨スムージー』。隠し味に忍ばせた、ティースプーン1杯分の自家製の梨バタージャムと混ぜ合わせ、味の変化を楽しめます。



素敵なキッチンカーと、バス停ならぬ『梨停』が目印の『ぶちスタンド』。



約3haの自社農園では、秋麗・あきづき・新高・晩三吉の梨を栽培中。



スムージーから、本格的なカフェメニューまで豊富に揃います。

### 健康長寿社会への **挑戦**

#### あらお健康手帳のデジタル化

# 03



2020年度グッドデザイン賞を受賞した「あらお健康手帳」。日々の体重・血圧や通院、おくすりの情報を記録して、健康管理に役立つだけでなく、病院や介護・福祉施設など、異なる職種間でも情報共有ができるので、連携して支援を受けることにもつながります。

現在、NECソリューションイノベータとともにスマートフォンなどでも使えるデジタル版を開発中です。年に1度の健診だけでなく、日々の健康状態を手軽に記録できるように健康づくりを支援します。

### 持続可能な農水産業への **挑戦**

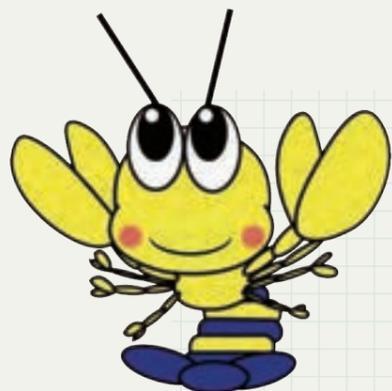
#### 特産物のPRや地産地消などで農水産業を盛り上げる

# 04

生産者や飲食店と連携し、荒尾産の農水産物をテーマにしたグルメフェアを開催します。荒尾には小岱山や有明海の恵みを受けて作られた美味しい農水産物がたくさんあります。地元の食の魅力に触れて、地産地消やSDGsを推進し、市内の農水産業を皆さんで盛り上げていきましょう。

大学生などの若い人材や農業を手伝いたい人達に農業体験や農作業の手伝いをしてもらい、荒尾の農業の魅力発信や地域農業の活性化につなげていきます。

「ヒト」や「モノ」の地域内循環を推進し、持続可能な農水産業の振興を目指していきます。



市では、市民の皆さんが  
住みやすいまちとなるよう  
これからも挑戦し続けます!



荒尾市の挑戦

# Challenge!

「暮らしたいまち 日本一」を目指す市では、輝かしい地域の未来のために、さまざまなことに日々挑戦し続けています。その中から市が取り組む挑戦をいくつかご紹介!



### 安心して学べる居場所づくりへの **挑戦**

#### ハートフルルームの設置を推進

# 01

これまで三中内に設置されていた適応指導教室「ハートフルルーム」が、今年度より海陽中・四中にも新たに設置されます。ハートフルルームでは、さまざまな理由で教室に入ることができない状態の子どもたちに、安心して過ごせる場所を提供しています。

児童生徒一人ひとりが個別に計画を立てて勉強を頑張ったり、花の苗植えや体育館を使った活動での仲間づくりを行ったりします。指導員が常時在中していますので、詳しくはいつでも気軽に学校か教育委員会までお尋ねください。



### 子育て世帯向け送迎サービスへの **挑戦**

#### 子育て世帯を応援

# 02

子どもの習い事などの送迎に対する負担を軽減するため、今年の秋頃に「子育て支援タクシー(仮称)」の実証実験を実施します。今年3月に配信を開始した荒尾市公式アプリ「おでかけあらお」や、「おもやいたクシー」を活用し、安心安全な送迎サービスの実施を目指します。詳細は、実証実験開始前に広報あらおや市の公式SNSなどでお知らせします。



# 地域の未来のために、荒尾市が挑む!

3/19 荒尾干潟の保全を目指して  
サンセットカフェ&コンサート開催

荒尾干潟保全・賢明利活用協議会主催「サンセットカフェ&コンサート」を2年ぶりに開催しました。午前中は雨が降りましたが、コンサートが始まると天気が回復しました。夕日を見ながら音楽を聴くことはできませんでしたが、雲間から青空と太陽の光が差す場面もあり、予定どおり演奏することが出来ました。当日は寒い中、多くの人が温かいコーヒーを飲み、荒尾干潟を見ながら演奏を最後まで聴き入っていました。



光が差す干潟の景色をバックに演奏しました。

3/18 ワクワクの2カ月間! グリーン  
ランドで春のイベント開催中!

毎年恒例、グリーンランドの春のイベント「2022春催事」が開催されています。オープニングセレモニーでは、浅田市長の挨拶に続き、子どもたちに人気の仮面ライダーリバイスも登場し、テープカットを行いました。5月29日までの期間中、遊んで学べるアトラクション「きかんしゃトーマスとなかまたちSTEAMアドベンチャー」が九州初登場。他にも人気のキャラクターショーなどが催される予定です。



寿 100歳おめでとうございます!  
こがもと 古閑本 ハツエさん(大和区)

2月18日に100歳の誕生日を迎えました。若い頃は鉄鋼所に勤め、男性と共に仕事をしていて身体は強いほうでした。現在は、週2回デイサービスを利用し、自宅では押し車を使いながらも自力で歩行しています。趣味は家庭菜園で、現在は家族が行う植栽を眺めるのが楽しみようです。



まちの話題

Arao City News



荒尾市の気になる  
話題をお届け!

地域の活動掲示板

荒尾市ではさまざまな活動が行われています!

グラウンドゴルフ大会



SDGs.3  
3/6 「すべての人に健康と福祉を」  
緑ヶ丘地区協議会

地域の健康づくりと交流のため、緑ヶ丘地区協議会主催でグラウンドゴルフ大会を開催し、地域住民約30人が参加しました。8ホールを2ラウンド回り熱戦を繰り広げたうえ、競技終了後はホールインワン大会も行い、盛り上がりました。当日は天気も良く、参加者は久しぶりの交流を楽しみました。

カライモ苗床づくり



SDGs.15  
3/4 「陸の豊かさを守ろう」  
府本地区協議会

毎年9月下旬に開催しているカライモ掘り大会に向けて、苗床づくりを行いました。種芋を植え付けて、約40日~50日かけて苗を作ります。その間の水やりや温度管理は、府本地区の区長が当番制で行います。今年もたくさんの人に喜んでもらうため、地域一丸となっておいしいカライモづくりに取り組みます。

寿 100歳おめでとうございます!  
たしま 田島 ナナエさん(北増永区)

3月12日に100歳の誕生日を迎えました。タバコ屋を営む実家に生まれ、和裁を習い、仕立ての仕事などをしていました。結婚後は、子育てしながら農業や貝掘り・海苔の養殖など、とにかく働き者で、休日は貝掘り仲間と日本舞踊や旅行など楽しみました。現在はグループホームで元気に過ごし、家族との面会時は、いつも笑顔で迎えます。ユーモアたっぷりで愉快的な優しい母だご家族は話します。



寿 100歳おめでとうございます!  
たていし 立石 ミスエさん(中央北区)

3月26日に100歳の誕生日を迎えました。幼い頃は、警察官の父に連れられ、熊本県内を転々としましたが、結婚後は予科練で教師を務めていた夫と鹿児島で生活を始めました。戦後は、大牟田・荒尾で三男の家族と暮らしていました。人の世話が好きで、自分より誰かのために生きてきた人と家族は話します。コロナ収束後は、世界中にいる大勢の親族と会えることを楽しみにしています。

